

波

ヨコテ

ゴーストタウンのように閉ざされた海の家連なりを通り過ぎ、尾木は一軒の古びた喫茶店の駐車場に赤のBMWを停めた。十台ほどのスペースに他の車はなく、松林が迫るコンクリートの地面の割れ目からは雑草が伸びていた。フロントガラスの先に広がっている海岸に人の姿はなかった。初秋の海辺は天気がよければ散歩を愉しむ人くらいはいるかもしれないが、海水浴に来る人はおらず、曇天の空の下、穏やかな波が虚しく砂浜に打ち寄せるだけだった。

尾木はエンジンを切った。エンジン音が消えると、助手席の好恵の息づかいが聞こえてきた。穏やかなその音に、不安は感じられなかった。安心しきった横顔。好恵は何も知らないし、勘づいてもいないだろう。

「何処に連れてってくれるのかと思ったら、ここだったのね」

知り合ってから一年とちょっとが経った。その記念とでも思っているようだ。

二人の交際は偶然から始まった。去年の夏、海の家で尾木が会社の同僚と休憩していたとき、隣に好恵たちのグループがやってきた。総勢六人の若い男女はすぐに仲良くなり、その後、町に戻っても皆で会うようになった。いつしかひとり抜け、ふたり抜けしたが、尾木は仲間に内緒で好恵とのデートを愉しんでいた。

「晴れればよかったんだけどな」

微かに不満の色をにじませ、尾木は言った。

陰鬱な天気は気分を萎えさせる。もっとドライにならなくては――と思った。

「そうね。あの日はいい天気だったもの」と、懐かしむように好恵が言う。

尾木も“あの日”を脳裏に思い描いた。

八月最初の日曜日だった。

尾木は平本と中森の三人で、海の家の一角に陣取り、焼きハマグリをつつきながらビールを飲んでいた。どうでもいい話をしながらも、三人の視線は自然と空いている隣のテーブルに向けられた。空いているテーブルは奥にもう一つ。三人の思いは同じだった。どうか若い女の子がこっちに来ますように。間違っても、うるさいガキの家族連れが来ませんように。

と、マーフィーの法則か、家族連れがやってきた。ふたりもガキがいる。しかも、どちらも真っ黒に日焼けしていて、いかにもそこら中を走り回りそうだ。すぐ後ろに女の子のグループがいた。ちょうど三人。ビキニの肩にビーチタオルを掛けている。尾木たちは目配せし、お互いの胸中を確認した。どの娘も可愛い。

尾木たちの祈りが通じたのか、それともむさ苦しい男どもの隣を敬遠したのか、家族連れは奥のテーブルへ行った。近づいてくる女の子たちを、内心ドキドキしながらも、男三人は平静の顔で見守った。

「何処から来たの？」

そんな定番の話から会話は始まった。同じ町から来たことが分かり、話は弾んだ。ショッピングセンターや本屋、学校など、共通の話題が多く、談笑は絶えなかった。

尾木は好恵に惹かれた。他のふたりに比べて控えめで、大きな瞳も尾木の好みだった。惜しむらくはその身体。ビキニがはち切れそうな他のふたりに対し、好恵は見劣りがした。そのときは、付き合ってもいけないのに、そんなことを考えてどうする？ と自嘲したが、好恵の身体を知った今の尾木は、物足りなさを否めなかった。

「早く入りましょうよ。喉が渴いちゃった」

助手席のドアを開け、車の横に立った好恵は目の前の喫茶店を見やった。白一色の外観はお洒落な雰囲気醸してあり、開店当初は多くの若者を呼び込んだのだろうが、数十年も経ってしまうと風雨に晒された痕がいくつかあり、痛々しいばかりだった。

物憂げに尾木が車から降りてきた。このところの尾木は元気がなかった。仕事が忙しいとは言っていたが、それにしても車中の会話は少なく、おざなりの返事ばかりだった。

「気がつかなかったわ、こんな店があったなんて」

「そうか？」

同意しなかったところを見ると、すでに見知っていたようだった。白の外観は目立つし、海の家からも近いので別段不思議ではなかった。あのとき、皆で遊んだときに覚えていたのだろう。そして一周年記念に、思い出の地に連れてきてくれた――。それはそれで嬉しかったが、好恵にはちょっとした不満があった。記念のデートに好恵はピンクのカットソーを新調したというのに、尾木はいつもの、首が少しよれた黒のTシャツだった。

玄関に店の名前が掲げられていた。『ブルー・ラグーン』

「青い珊瑚礁だなんて変なの。この辺に珊瑚礁なんてないのに」

「ただの名前じゃないか」と、尾木が素っ気なく言う。

そんなの分かっているわよ。言ってみただけじゃないの。

あの人ならそんな言い方はしなかっただろう。うんうんと頷き、笑いながらきっと同調してくれたはずだ、おまけに白くて青くないし、と付け加えて。

尾木が玄関のドアを開けた。

町の喫茶店では見かけなくなったカウベルが、カランコロンと鳴る。

中に入ると、店内も白一色だった。ただし外観と同じで、ところどころ黴の痕のような黒ずみがあり、その古さは隠しようがなかった。諦めて隠そうとしていないのかもしれない、と好恵は思った。客が入ってきたというのに、店の女主人はカウンターの中で携帯電話を離そうとしなかった。語気が荒く、怒ったような顔をしている。話がこじれて、客どころではないのかもしれない。女主人のやる気のなさが窺われ、好恵たちは案内されないまま窓際のテーブルに座った。他に客はいなかった。

尾木がテーブルに置かれていたメニューを手に取り、チラリと眺めてから好恵に渡した。

「何にする？」

「アイスティーとチーズケーキにするわ」

思い出に残りそうな、何か特別なものを注文したかったが、そんなものはメニューに載ってなかった。こんな店では仕方ないのだろう。

好恵たちは女主人の電話が終わるのを待った。

「感じの悪い店ね」と、声をひそめて好恵は言った。

「そうかな。まあ、綺麗じゃないけど……」

「ううん、あの女の人よ。ここの店長だと思うんだけど、客が来たっていうのに知らんぷりなんてあり得る？」

「タイミングが悪いだけさ。込み入った話をしてるんだろうが、もうすぐ終わるよ」

しかし、尾木の言葉どおりにはならなかった。女主人はなかなか話をやめようとせず、目障りだとも言いたげに、好恵たちに背中を向けた。

「何よ、あれ」

好恵は怒りの混じった、呆れた声で言った。

「聞かれたくないだけさ」

「そうかもしれないけど、そもそも電話してること自体がおかしいわ」

好恵は店を出たくなった。これでは記念日が台無しになる、と思った。

そのとき、女主人の怒声が店内に響いた。

「ふざけないでよ！」

尾木と好恵は顔を見合わせた。

「ねえ、出ましょうよ」

「そう言うなよ。長い運転で疲れてるんだから」と、尾木が渋い顔で言う。

長い距離ではない。町から一時間もかからずに来られる。仕事で疲れているというのなら分かるが、運転で、というのは解せなかった。好恵は尾木の顔を凝視した。尾木は何かを熟慮していた。それは何だろう。ひょっとして――プロポーズ？ 様子がおかしかったのは、その緊張のため？

やっと女主人が、何事もなかったかのように水を持ってきた。

「何にしますか？」と、つけんどんに言う。

「アイスティーとチーズケーキ。それとアメリカン」

「申し訳ありません。あいにくチーズケーキは切らしてまして」

「じゃあ、いらない」と、好恵も負けずにつけんどんに言った。

女主人は立ち去る際、好恵をまじまじと見つめ、尾木をいぶかしげに見ていた。

この男は確か先週、いや先々週だったか、別の女と来ていた、と女主人の真紀子は気づいた。

カウンター内に戻り、アイスティーとアメリカンを作り始める。親から引き継いだ当初は手際が悪く、客を待たせてばかりだったが、今ではすっかり慣れ、同時進行も余裕でこなせるようになった。それでも、愛想笑いを作るのは未だに上手くない。この仕事が向いているのだろうか、真紀子は何度も自問した。答えはいつも同じところへ帰結した。自分には親が遺してくれた『ブルー・ラグーン』しかない――。

注文の品を作りながら、チラチラと尾木たちに目を這わせる。

一見すると恋人同士のようなのだが、そうすると前に連れてきた女は何なのか。どちらかといえば前の女の方が彼女っぽかった。自然な感じで話をしていたし、時折、嫉ましいほどいちゃつくこともあった。だが、目の前の女に対する男の態度には高揚感が見られなかった。平静そのもので、浮かれたところがない。逆に、女の方ばかりが嬉しそうに話をしている。前の女とは別れたのだろうか。別れて新しい女を連れてきたのかもしれないが、二股と考えるのが妥当だろう。この女をどう口説こうかと慎重になっているに違いない。しかしまあ、二股であれ何であれ、どうでもいいことだ。自分には関係ない。

真紀子の目下の問題は、元夫が娘の養育費を払わなくなったことだった。喫茶店の売り上げは年々減っていくのに、娘の出費はどんどんかさんでいく。建設会社の社長である塚本からの養育費が得られなくなれば、生活はいずれ困窮してしまうだろう。喧嘩別れになった、さっきの電話が悔やまれる。

「社長なんだから、娘の養育費くらいなんとかなるでしょう？」

「こっちの財布の事情くらい分かってるだろう。こっちは公共事業が駄目になって青息吐息なんだ。そっちは喫茶店があるから何とかできるだろう」

「ならないわよ。約束が違うわ。毎月払うことになってるじゃない。一方的にやめるってどういうことよ？ 先月も先々月も払わなくて……」

「仕方ないんだ。俺は報酬を二十パーセントもカットしてるんだぞ。社員の給料だって十パーセントカットしてるんだ」

「そんなの知らないわよ。報酬のカットを三十パーセントにすればいいじゃない」

「できるか。元々が少ないのに」

「だったら社員の給料を十五パーセントカットにすればいいのよ。そしたら沙也香の養育費だって捻出できるんじゃないの？」

「馬鹿言え。今でさえ精一杯なんだ。この二年、ボーナスなしで我慢してもらってるんだぞ。自分のことで給料を下げたいなんて言えるか」

塚本の苛立たしさが真紀子にも伝染した。

「沙也香が可愛くないの？」

「可愛いに決まってるだろ」

「だったら何とかしなさいよ。どうせギャンブルにつき込んでるんでしょ？」

「……」

「何か言いなさいよ」

「俺はできる限りのことをした。あとはお前がどうにかしろ！」

「ふざけないでよ！」

娘を顧みようとしない元夫に、真紀子は猛烈に腹が立った。

電話は切れた。

今の自分が頼れるのは塚本しかいないのを、真紀子はまざまざと思い起こしていた。だがその一方で、庇護してくれそうな男性との再婚を邪魔しているのも塚本の存在だと思っていた。こぶつきの四十女は珍しくないが、犯罪者の元妻というのはそうはいない。

尾木は、最近の出来事を饒舌に話す好恵の口元を見ていた。

このところ、仕事が忙しいふりをして会うのを避けてきた。電話やメールは何度かしたが、デートは久しぶりだった。そして今日が最後になる。多少の後ろめたさはあったもの、尾木は割り切っていた。男と女、いつかはそうなるものだ。ずるずると関係が続ける方がよほど罪深い。

そろそろ切り出さなければ――

好恵の瞳に視線を据える。

「どうしたの？ 急に」

好恵が困惑の笑みを漏らした。

「今日ここへ来たのは、好恵に言わなきゃならないことがあるからなんだ」

尾木が静かに話し始めると、好恵は何かを期待する目で見返してきた。

「なに？」と声を弾ませ、瞳を輝かせる。

尾木はたじろいだ。

嬉しそうな顔。どういうことだ？

好恵は何か勘違いをしている――。

「僕たちふたりの関係なんだけど……」

好恵の考えを推し量りながら、尾木は話を続けた。

「終わりにしたいんだ」

好恵の顔から血の気がさっと引き、狼狽がありありと窺えた。

「冗談でしょ？」と非難するように言い、こわばった笑みを浮かべる。

「こんなことを冗談で言うほど悪い男じゃないよ」

品行方正でないのは自覚している。それは誰しも似たようなものだ。別れないまま他の女と付き合っている男は、世に掃いて捨てるほどいる。だが、自分はこうやって面倒くさい別れ話をしている。少しは誠実さの欠片を示せている――と尾木は思っていた。

「どうして？ どうしてなのよ？」

声のトーンを上げ、好恵が瞳に力を込める。

「どうしてって……知ってるだろ、仕事が忙しいんだよ。好恵と会う時間が作れないんだ。今日だって本当は会社に行かなきゃならなかったんだ」

「日曜なのに？」

「新しいプロジェクトが立ち上がったばかりで、僕は結構重要なポジションを任されているんだ。だから専念したいんだよ」

会社の話で煙に巻く、それが一番だ。本当のことを言うわけにはいかない。

「新しいプロジェクトって何よ？」

好恵はなおも食いついてきた。

「新商品の開発だよ。うちは旅行会社だからね、行き先とか費用とか、他社に負けないようなプランを常に考えなければならないんだ」

「そう。でも、忙しいのは分かるけど……」

好恵が不満の色を見せる。

「だからって別れなくちゃいけないの？ 会えないのは寂しいけど、わたし我慢できるわよ」
長引くかもしれない、と尾木は予感した。

「嬉しいよ、そう言ってくれて。だけど、現実を見て欲しいんだ。世の中にはたくさんの男がいる。よりによって、僕みたいな心に余裕のない男を選ぶことはないんじゃないか。一ヶ月に一度会えるかどうかの彼氏なんて嫌だろう？」

「嫌じゃないわよ。我慢できるって言ったじゃない」

「僕は嫌なんだよ、好恵をそんな状況に置いておくことが。自分のせいで好恵につらい思いをさせていると思うと申し訳なくて……」

心にもない嘘が口をついて出てきて、胸が締め付けられる。

悪い男の部類に入りそうだ、と尾木は思った。

「本当にそう思っているの？」

「当たり前じゃないか」

気色ばんでみせる尾木に、好恵が疑念の瞳を向けた。

「ふうん」と何かを含むような、小馬鹿にした言い方をした。

「わたし……知ってるのよ」

好恵の不敵な笑みに、尾木は憂慮を覚えた。まさか——と思う。

「な、何のことだ？」と、尾木が目を泳がせて言う。

「決まってるじゃない。真実よ」

「真実？」

「そうよ。黙ってたけど、わたしはあなたの本当の姿を知ってるの」

好恵はカマをかけた。あやふやな情報だったが、尾木の何かを危惧する様子からすると、どうやら本当のことだったのかもしれない。

「本当の姿だなんて……それじゃあまるで僕が騙してたみたいじゃないか」

「違うの？」

「ああ。僕は真摯に好恵と向き合ってきたつもりだ」

尾木の小鼻がピクリと動いた。何処までも嘘を突き通す魂胆らしい。

「じゃあ言うけど、佳菜子から聞いたの、あなたと多香子が付き合ってるんじゃないかって。まさかふたりを忘れたなんて言わないわよね」

「覚えてるよ。確か最後にあったのは去年の冬頃じゃなかったかな。僕と多香子が付き合ってるって？ 佳菜子もいい加減なことを言うな」

「付き合っていないの？」

「当たり前じゃないか。そりゃあ魅力的な女性だとは思うけど、それだけだよ。それに彼氏がいたんじゃないかな。そう聞いていたけど」

好恵は尾木の言葉を信じたくなかった。

「彼氏とは今年の春に別れてるわ。四月にね。彼が転勤になって、それで別れたのよ」

「それは初耳だな。まあ、どうでもいいことだけど」

尾木の表情を読み取ろうと努める。嘘？ ホント？

好恵は判断がつかなかった。たださっきまでと違い、尾木の言葉には自信がみなぎっていた。

「佳菜子が言うには、多香子は彼と別れたあと、あなたにアタックをかけたんじゃないかって。美人でグラマラスな多香子のアタックを躲せる男なんてそうそういないわ。多香子が嬉しそうに言ったんだって、新しい彼氏ができたって」

「それが僕なの？」と、尾木が呆れたように言う。

「佳菜子はそう思ったの。名前は教えてくれなかったけど、ピンときたんだって。皆で会ったとき、多香子の一番のお気に入りはおなただったのよ。だから、新しい彼氏は尾木さんじゃないのって佳菜子は訊いたの。そしたら多香子はウンとも違うとも言わないで、ただ笑っていたらしいわ。それって認めたことと同じだと思うんだけど……違うの？」

自分の一番のお気に入りが尾木ではなかったことを思い出しながら、好恵は訊いた。

尾木がニヤリと笑った。

「佳菜子は担がれたんだよ。そんな佳菜子の話を真に受けるなんてどうかしてる」

「本当に多香子の新しい彼氏ってあなたじゃないの？」

「違うよ」と、尾木が決然と言い放つ。

おっぱいがでかいだけの多香子に、尾木を寝取られないでよかった、と好恵は思った。安堵すると同時に、虚無感が好恵を襲う。

最悪の事態は免れたようだが、根本的な状況は何も変わっていなかった。

尾木から切り出された別れ話――

「仕事なら……仕方ないわね。あなたを困らせるつもりはないの。ただ……約束して」

「何を？」

「時間に余裕ができれば、また付き合うって」

尾木が顔をしかめた。

「いつになるか分からない話の約束なんてできないよ」

「そんなに先の話じゃないでしょう？」

「だから分からないんだって。僕は好恵を縛り付けておきたくないんだ。こんな仕事中毒の僕と付き合っても幸せになれるわけがないじゃないか。僕は好恵のためを思って言ってるんだぞ」

尾木が猫撫で声で言う。

不自然なほどに優しい微笑み。

お為ごかしか？

好恵は嘘の臭いを嗅ぎ取った。

妙な具合になってきたものだ、と真紀子は思った。

切れ切れに聞こえてくる言葉から推察すると、どうやら別れ話のようだ。女の方が別れを拒んでいて、男が必死に説得している図式らしい。

他人の不幸は蜜の味――。

真紀子は薄ら笑いを漏らした。挽き終わったばかりの豆をドリップに入れ、お湯を注ぎながら哀れな女を盗み見する。

あなたも不幸な女ね。あんなに嬉しそうだったのに、あっという間に奈落の底。寝耳に水の話だったのね、みるみる顔色を変えちゃって。あなたの愛を彼は受け止めてくれなかったのね、ご愁傷様。捨てられたの？ それとも、はなから相手にされなかったの？ でもね、どっちであれ、わたしに比べたらあなたの不幸なんて些細なものよ。

冷やしておいた濃いレモンティーを冷蔵庫から取り出し、クラッシュアイスのグラスに注ぐ。

あなたの年の頃までは、わたしはごく普通の女だったわ、何処にでもいるような。顔立ちは悪い方じゃないと思うんだけど、全然目立ってなかった。化粧が上手くなかったせいね。でもよくしたもので、彼氏ができたわ。藤井っていうんだけど、今でもよく覚えてるわ。できたことが嬉しくて、しかも背が高く格好良かったものだから、わたしは自分を見失ってしまったの。それが不幸の始まりね。五年間付き合っ、浮気の疑惑に目をつぶって貢いだというのに、わたしが浮気相手だったなんて――まるで安っぽいメロドラマね。親に借金してまで貢いだのよ。それなのに、そのお金で男はブランド物のバッグや装飾品を女に買い与えたり、旅行に行ったりしていたのよ。そんなこととは露知らず、喜び勇んで彼に抱かれに行っていたわたしは何だったの？

コーヒーサーバーから白磁のマグカップにアメリカンを注ぐ。

そして両親が交通事故で死んだわ。わたしがちょうど三十歳の時よ。藤井と別れた直後だったから本当に堪えたわ。何もかもが嫌になり、絶望的になったの。死にたいとさえ思ったわ。でもそんな勇氣はないし、食べていかなきゃならないから、両親が遺してくれたこの店を必死に切り盛りしたの。そんなとき出会ったのが塚本だったわ。気さくに話しかけてくれて冗談も面白かったし――まあ、今にして思えば、沈んでいたわたしは笑いに飢えていたのかもね。すぐに仲良くなって、付き合うようになった決め手は、正直に言って社長という肩書きよ。生きていくのは綺麗事じゃないもの。でも、建設会社の社長っていうから期待してたんだけど、実態は田舎の土建屋ね。十人ちょっとの零細企業だったわ。塚本のプロポーズを受けていいものかどうか迷ったけど――だってバツ二だったのよ。しかも二回とも離婚理由は塚本のギャンブル依存症。金がないっていうけど、今も隠れてやっているに違いないわ。

結局、もうギャンブルは絶対しないと言う塚本に折れて結婚したの。そして沙也香が生まれたわ。幸せだった。これでわたしも人並みに幸せな人生をおくれる、そう思った矢先だったわ、塚本が逮捕されたの。

お盆にアイ스티ーとガムシロップとストロー、アメリカンとミルクピッチャーを載せて運ぶ。

男と女の会話はとまっていた。空疎な空気が辺りを包んでいる。

それはそうよね。あなたたちの他にも何度か見たけど、別れ話の席ってこんなものよね。思い出したけど、一度だけ暴力沙汰になったことがあったわ。コップの水を女がぶっかけ、男が怒って女を平手打ち。殴り合いの応酬になり、女がヒールの踵で男の額を殴ったの。流血騒ぎになって、さすがに止めに入らざるを得なかったわ。本当はもう二、三発やられるのを見ていたかったんだけどね。他のお客さんが警察を呼んだんだけど、犬も食わない痴話喧嘩だからと言って追い返してやったわ。そこいくと、あなたは我慢強いよね。我慢しなくてもいいのよ。あなたは何も悪くないんでしょから、せめて気が済むまでもっと大きな声で怒鳴りつけてやればいいのよ。

真紀子は好恵に同情的な目を向けた。お盆にのっている注文の品をテーブルに置く。

「ごゆっくりどうぞ」と、皮肉を込めて言い、男を一瞥する。ひと仕事を終えて安んじているような男の様子に、いっそう腹が立つ。

この男が悪いに決まってるわ、何もかも。

言ってやりなさいよ、わたしをなんだと思ってるのよって。

好恵をやり込められたのではないかと、尾木は密かに安堵していた。好恵は声を引っ込めた。反撃の言葉を探しているのかもしれないが、何を言っても動じない自信が尾木にはあった。

多香子とのことを誤魔化し切れた今、早くこの場を去った方が良さそうだ。

先日の来店を覚えているはずがないと思っていたのに、女店主から不穏な空気が発せられ、尾木は気になった。視線に敵意が感じられる。その理由は分かっていた。自分のことを、日を置かずして別の女を連れてきた遊び人、とでも思っているのだろう。今後、二度と来ることはないだろうから、女店主にどう思われようと構わなかったが、この前は別の女性と来ていましたね——などと話しかけられては堪らない。反感を買っているようだから、その恐れはなきにしもあらずだ。

好恵をここへ連れてきたのは間違いだったか——。

本当は今日も、平本から借りたBMWで多香子とドライブデートするはずだった。予定が変わったのは多香子から電話があったからだ。

「好恵を騙しているようで嫌なの。早くけじめをつけてよね」

けじめがつけられなければ、軌道に乗り始めた多香子との関係も怪しくなりかねない。

別れ話の場所は何処でもよかった。BMWを借りられたのでせっかくなら遠出しようと思い、何となくここにただけのことだった。好恵が思っているような、出会って一周年の記念ではなかった。それは先日、多香子との間で行われた。

最後の思い出作りに高級車は役立ってくれるだろう——そう意図した尾木だったが、好恵には響かなかった。借り物とはいえ、多香子は喜んでくれたのに。

「平本さんの実家はお金持ちって聞いてたけど、さすがね」

今回も平本は嫌な顔をせずに愛車を貸してくれた。優しくて気が利いて、おまけにお金持ち。見た目は普通だが、それで充分だろう、よくもてる。言い寄る女をさばききれないと冗談めかして言ったことがあったが、あながち嘘ではなさそうだ。

好恵はBMWに興味を示さなかった。だから尾木もあえて言わなかった。話したところで、ふうん、と気のない反応しかしないだろうし、ましてや、友人から借りた車を自慢しているようで、それはそれで惨めだと思った。

女店主が去って行った。どうやら告げ口をする気はないらしい。

好恵がガムシロップを入れないままアイスティーにストローを差し、口をつける。尾木はミルクだけ入れてアメリカンをすすった。

窓の外を見やる好恵の横顔を眺めながら、尾木はこの一年の、我が身の変遷をたどった。

海の家で出会った女の子たちの連絡先を訊いたのは中森だった。ひょうきん者の中森はそういった役回りにうってつけで、後日の再会を約束させ、再会の場を盛り上げた。何度か飲み会をやったあと、中森が佳菜子をデートに誘った。上手くいくかと思ったが、佳菜子には社内に恋人がいた。あとで好恵がこっそり教えてくれたのだが、佳菜子は社内不倫中だった。その事実を今でも中森は知らないだろう。気が引けたのか、その後の飲み会に佳菜子は来なくなり、中森も姿を見せなくなった。いつしか自然消滅となったが、却ってその方がよかったと尾木は思った。これで気兼ねなく好恵に好意を伝えられる――。

尾木の申し出をまったく予想していなかったようで、最初、好恵は戸惑いを見せた。中森と同じように自分も玉砕かと思ったが、好恵は少し考えさせてくれと言い、一週間の後、OKの返事をくれた。一週間の熟慮――そのとき気づいていればよかったのだが、好恵は何事にも確然としていて、四角四面な窮屈な女だった。結婚願望を匂わせるようになり、尾木の心はさらに離れた。そんなとき、多香子が声をかけてきた、彼氏と別れたばかりで寂しいと。慰めているうち深い仲になり、好恵の存在は完全に消えた。そして多香子から好恵と早く別れるように催促されている。

好恵は窓の外に向けていた視線をアイスティーに移し、ストローで氷をかき回して口をつけた。重い空気が流れる中、ゆっくりと同じことを繰り返しているうちに、グラスは氷だけになってしまった。カラカラと音を立てて好恵が氷を回す。

尾木はただ好恵がもう一度、出ましようよ、と言うのを待っていた。

どうすれば尾木の嘘を暴けるのか――それだけを好恵は考えていた。言いくるめられた感があり、屈辱的で、癢で仕方がなかった。

多香子と付き合っているかどうかは別にして、少なくとも別れの理由が、仕事が忙しいからというのは嘘に違いない。仕事を免罪符にすれば容易に事が運ぶとでも思っているのだろう。仕事と言われたら対抗のしようがなく、昔から安直に使われてきた別れの手手段だ。その嘘を暴きたい。安堵感に浸っている尾木の鼻を明かしてやりたい――

尾木の会社へ行って、新しいプロジェクトが実際にあるかどうか訊いてみようか？ 尾木が責任者となったプロジェクトがあるかどうか――

好恵は胸中で首を振った。

そんなみっともない真似はできない。男に振られて頭のおかしくなった女が押しかけてきた、と思われるのが落ちだろう。それに、第一、会社の内情をおいそれと教えてくれるはずがない。仕事の嘘を暴くのは難しそうだ。だとしたら――

「本当に多香子とは付き合っていないのね？」と、話を蒸し返す。

「ああ。何度同じ話をさせるんだよ」

口調は穏やかだったが、尾木の表情は見るからに不機嫌そうに変わった。

「それじゃ、多香子に直接訊いてみてもいいのね？」

威嚇するように、尾木を見据える。

尾木は目をしばたたかせた。ポカンと開けた口に、必死に言葉を手繰り寄せるのが見て取れた

。

「変なこと訊いて彼女に迷惑だろう」

「変なことじゃないわよ。大切なことよ」

「どうして好恵は分かってくれないんだ」

呆れたと言わんばかりの顔をして尾木が言う。

「あなたが本当のことを言ってくれないからじゃないの」

好恵はバッグから携帯を取り出し、多香子のページを開いた。

「勝手にしろ」

吐き捨てるように言い、苛立ちを顕わにして、尾木は残りのアメリカンを飲み干した。その苛立ちは信じてもらえなかったことへの悔しさなのか、それともどうにでもなれという開き直りなのか、好恵には判断がつかなかったが、おそらくは後者だろうと直感した。

携帯の画面に映る多香子の番号を、好恵はじっと見つめた。ボタンを押せばすべてはハッキリするはずだ。もう少しで――

ボタンに親指を載せる。

好恵の脳裏に迷いが生じた。

すでに多香子との間で話がついており、電話をかけても多香子かとぼけたとしたら――

なに馬鹿なこと言ってるのよ。そんなわけないじゃない、わたしと尾木さんが付き合ってるだなんて。信じられないの？ わたしを疑うの？ 好恵を見損なったわ。

あるいは――

ばれちゃったみたいね。そうよ、尾木さんと付き合ってるわ。別に隠していたわけじゃないのよ。あなたが気づかなかっただけ。尾木さんは好恵を捨ててわたしのところに来たのよ。わたしを選んだのよ。邪魔しないでよね。

聞きたくない。

多香子が本当のことを話してくれたとしても信じ切れないだろうし、ましてや蔑みの言葉を浴びせられたら立ち直れないかもしれない。

好恵は携帯をバッグにしまった。

怒り、恥辱、後悔、そういったものが胸の中で黒く渦巻いている。

「電話しないのか？」

尾木の顔は心なしか綻んだようだった。

「しないわよ。どうせ多香子と話がついてるんでしょ？」

「まだそんなことを言うのか。いい加減にしろ。怒るぞ」

尾木が眉をつり上げる。

「怒ればいいわ。そうやって自分を正当化すればいいじゃない」

またしても尾木は、もううんざりだ、といった顔をして見せた。

「なによ、怒らないの？」と揶揄して言う。

尾木を怒らせたかった。喧嘩に持ち込んで、胸中の黒いモヤモヤを発散させたかった。だが、尾木は乗ってこなかった。

「馬鹿らしい。これじゃ堂々巡りじゃないか」

「あなたがそうしてるんじゃないの」

「俺が悪いのか？ 何でも俺のせいかな？ それだったら何を言っても無駄なようだな。俺の話は信じてくれなくてもいいが、こっちの言い分はちゃんと伝えたからな。もう電話してくるなよ」

高圧的で人を見下した言い方——あの方はこんな言い方をしなかった。別れに際して、もっと優しくしてくれた。嘘は吐かず、誤魔化しもせず、潔かった。

「僕に結婚を求めるのならお門違いだ。縛られたくないし、まだまだ遊びたいからね。だからといって好恵のことは嫌いじゃないし、友人のひとりとしてなら喜んで付き合っていけると思う。困ったことや相談したいことがあったらいつでもメールなり電話なりしてきていいから」

そう言われて、好恵は別れを決意せざるを得なかった。甘えては申し訳ないと思い、その後連絡はしていない。本当は別れたくなかった。その思いは今も心の奥底にしまっている。それに比べて尾木ときたら——その矮小さが際だって仕方がない。尾木の誠意のなさや自分の男を見る目のなさに腹が立ち、好恵はグラスの氷を一口に含むと、バリバリと音を立てて噛み砕いた。

氷を噛み砕く音が聞こえ、女主人の真紀子はひょいと顔を向けた。てっきり男の方が音を立てているのかと思ったら女だった。

わたしはこんなに怒っているのよ、というアピールに違いない。

いいわよ、その調子。もっとやりなさい。何ならその横っ面を張り倒してもいいんじゃないの、他にお客さんはいないんだから。

真紀子は客の様子を気かけながら玄関の外に出た。

“営業中”の看板を裏返して“準備中”に変える。

まだ三時にもなっておらず、早い店じまいだったが、今日はもう仕事をする気になれなかった。あの客が来店したために塚本との話し合いが中途半端のままに終わってしまっていて、急いで再開させたかった。

ふと駐車場を見やると、真っ赤な高級車が駐まっていた。言うまでもなく、あの客が乗ってきた車だ。あの男も派手好きで、見栄っ張りで、頑固者なのだろうと真紀子は思った。塚本が同じような赤い外国車に乗っていたからそう思ったのだが、店内での様子を見るにつけ、外れてはいないはずだと決めつけた。暴力的な傾向があのお客にもあるかどうかは分からないが、塚本と大して違わないだろう。

傷害事件を起こし、塚本は逮捕された。沙也香が生まれて三年目のときで、近くのスナックで塚本と飲んでいて他の客に絡まれ、塚本が殴ってしまった。鼻骨を折る大怪我を追わせたものの、双方ともに酔っていたこともあり、罰金刑で免れた。そのことで近所での塚本と真紀子の評判はガタ落ちとなった。以前は『ブルー・ラグーン』に顔を見せてくれた人たちも寄りつかなくなり、疎遠になってしまった。犯罪者の嫁という肩書きに我慢ならず、真紀子は塚本と別れた。しかし、犯罪者の元嫁という不名誉はいつまでもついて回った。誰も知らないところへ行きたい――その思いは常にあったが、未だに果たされていない。

店内に戻ると、ちょうど男の客が椅子から立ち上がったところだった。トイレに行くのかと思ったが、違った。男はまっすぐレジへとやってきた。険しい顔をしているものの、何処かしら安堵の様子が窺える。

「お会計を」

「八百円になります」

男は支払いを済ませ、外へ出て行った。女がゆっくりこっちへ向かってくる。

「ごちそうさまでした」

軽く会釈をする女の声は暗かった。表情にも生気がない。

「元気を出してね。わたしはあなたの味方よ」と、思わず口にする。

女はきょとんとした。

「わたしも男でひどい目に遭ったことがあるの」

真紀子が自嘲の笑みを浮かべると、戸惑いを見せつつ女も微笑んだ。

女はもう一度、会釈をして去って行った。

真紀子は女の後ろ姿を見送った。

二度と会うことはないでしょうけど、陰ながら応援させてもらうわ。

BMWに乗り込むと、尾木は、ふう、と溜め息を吐いたあと、唇を真一文字に強く結んだ。ひと段落したことは確かだが、まだ予断を許さない。好恵が完全に納得したとは言いがたく、憤懣が胸の中に燻っていることだろう。あれほどまでに、好恵に粘着性があるとは思ってもよらなかった。多少の不満を口にするのは想定していたが、好恵のそれには鬼気迫るものがあった。

これで終わるはずがない。帰りの車中はきっと地獄だろう。尾木は、どうしたものかと、先程とは打って変わって深憂の溜め息を吐いた。ともかく時間が早く過ぎるのを祈るのみ――。

助手席のドアが開いた。薄笑いを浮かべながら好恵が乗り込む。

「お店の女の人ったら変なこと言うのよ」

「変なこと？」

尾木はギクリとした。先日、多香子と来たことを告げたのだろうか。

「わたしの味方なんだって」

多香子とのことではないようだ。しかし、どういうことだろう。意味が分からない。

「何だよ？ それ」

「話が聞こえてみたいね。あの人も男にひどい目に遭わされたことがあるんだって」

「ひどい目に遭わせただなんて……あんまりな言い方だな」

確かにひどいことをしたのかもしれないが、男と女の別れに際しては仕方のないことだ。相手を傷つけずに別れるなんてできるはずがないし、こっちが傷つけられることだってある。男と女はフィフティーフィフティ、非難されるいわれはない。ましてや、たいして知りもしない女の出る幕ではない。

「あら、そうかしら？」と、好恵が嫌味たっぷりに言う。

またしても蒸し返されそうな雰囲気、尾木は辟易し、苛立ちを覚えた。

「何もかも僕が悪いような言い方じゃないか」

「違うの？」

「こんな結果になって申し訳ないと思ってるよ、こっちの都合で一方的に交際を打ち切ることになったんだから。だけど、仕方ないじゃないか、僕の頭の中は仕事のことばっかりなんだ。悪いけど、好恵のことを考える余裕はないんだ」

尾木はまだ言い足りなかった。

「この際ハッキリ言っておくよ。もううんざりなんだ。僕の目の前から消えてくれないかな」

尾木は、好恵が怒って車から出て行っても構わないと思った。

好恵を置き去りにして帰ったとしても、味方と称するあの女が何とかしてくれるだろう。そして多香子とのこともばらされるかもしれないが、結構なことだ。遅かれ早かれ、いずれはばれてしまうのだから。

好恵の膝の上に置かれた拳がプルプルと震えていた。涙が零れるのを防ぐかのように、フロントガラスの上方を睨みつけている。全身が強ばり、今にも爆発しそうだった。しかし次の瞬間、好恵の身体から力が抜けていった。不敵な笑みさえ浮かべて、それは何かを企んでいるようだった。

「わたし煙草が吸いたくなっちゃった」

「煙草？ 煙草を吸うなんて知らなかったな」

何を言い出すんだろう、と尾木は思った。何かを企んでいるようだが、その意図が掴めない。

「吸わないけど吸いたくなったの。持ってない？」

「僕が吸わないのは知ってるだろ。その辺のコンビニで買ってくればいいじゃないか」

「買いに行かなくてもここにあるわよ」と言い、好恵はダッシュボードを開け、中からマルボロとジッポを取り出した。

尾木は面食らった。好恵は今日初めてこの車に乗ったはずだが――

「どうして知ってるんだ？」

「さあ、どうしてでしょうね」

好恵がジッポを手のひらで転がす。

「前にも乗ったことがあるのか？」と、訝しげに訊く。

「ピンポン。この車には何度か乗ったことがあるわ。トランクにはゴルフバッグとテニスラケットが入ってるわね、二人分の。優雅なデートを愉しませてもらったわ」

「平本と付き合いってたのか？」

尾木は驚きの声で問いかけた。聞き間違いではないかと思った。

「だからそう言ってるじゃないの。わたしの本命は平本さんだったのよ」

聞き間違いではなかったようだ。しかも、平本が本命？ それじゃ俺はいったい何だったんだ？

尾木は怒りで顔が赤くなるのを感じていた。

ほーら怒った、と好恵は胸中でほくそ笑んだ。

どうやったら尾木にひと泡吹かせられるか――それだけを考えていて、やっと見つけた答えがこれだった。思っていた以上の手応えに、好恵は充足感を持った。

尾木の鼻を明かしてやったとの思いがある一方、平本に対して申し訳ないとの思いもあった。平本に尾木とのことは話していない。何でも相談に乗ってくれると言っていたので話してもよかったのだが、よけいな気遣いをさせたくなかった。話したとしても大人の対応をして、尾木にはふたりのことは秘密にしてくれていただろう。平本の泰然とした姿勢が懐かしい。

「僕は、好恵がこの先、誰と付き合いでも祝福するよ。たとえ僕の知り合いだとしてもね」

それは尾木と付き合うのを予見していたかのようだった。

尾木が深く座っていた座席から身を起こした。

「平本と上手くいかなかったから、僕に乗り換えたってわけか……」

片眉をつり上げ、不機嫌そうに言う。

「乗り換えたって……失礼な言い方ね」

「実際そうじゃないか。僕は平本の次か？ 次でしかないのか？」

尾木の息づかいが荒くなった。平本に対し、相当のコンプレックスがあるようだ。

「乗り換えたとか、次とか……馬鹿じゃないの。あなたが言ってきたんじゃない、付き合ってくれって。忘れたなんて言わせないわよ。可哀想だから付き合っただけのことよ」

尾木をいたぶる快感が好恵の中でいや増す。

「常識的に考えてみてよ、どっちが魅力的か。誰だって平本さんを選ぶわ」

「損か得かだろ？」

「何とでも言えばいいわ。平本さんと比べたらあなたなんて月とスッポン、大トロとカップ巻きね。まあ、百人中ひとりくらいはカップ巻きの方が好きな人もいるでしょうから、あなたみたいな男を選ぶ人もゼロではないかもね」

尾木を叩きのめした感があり、好恵は恍惚となった。勝利を確認すべく尾木の横顔を見やると、ぐうの音も出ないように、渋い表情をしていた。唇が震えている。その唇がゆっくりと開いた。

「そうやって平本とふたりで、俺を笑いものにしていたのか？」

「何それ？」

好恵は鼻で笑った。今でも連絡を取り合っていると邪推しているようだ。勝手に思わせておいてもよかったのだが、平本には迷惑をかけたくなかった。

「変な風に考えないでよね。平本さんとは終わったのよ」

「ふん、どうだかな。車は借り物。女はお下がり。どうあっても平本には敵わないってことか」

お下がり——瞬間的に、好恵の頭に血が上った。

「お下がりって何よ！ 人のことをお下がりだなんて……」

激昂しすぎて言葉が続かない。

尾木がせせら笑いながら言葉を継いだ。

「思ってるわけないよな。お前は誰とでもすぐに寝る女だからな」

パシッーと、好恵は尾木の横面を叩いた。思わず手が出た。

「最低！ あなたって本当に最低の男ね」

ドアを開け、好恵は外に出た。尾木と同じ空間にいることに耐えられなかった。生まれてこの方、これ程の怒りを覚えたことがない。

「自分が何を言ってるか分かってるの？」と、車の中の尾木を睨みつけて言う。

尾木はフロントガラスの向こうを見ていた。そこにこの戦場から逃れられる安息の地があるかのように。

「ああ、分かってるよ。お前が次は中森と寝るってことがな」

中森？ 誰だっけ？ ああ、そうだ――

三人組の最後の一人を思い出した好恵は、同時に佳菜子や多香子の姿も思い浮かべた。助手席に座っている多香子が見える。

「いい気なもんね、平本さんの車に女を乗っけてカッコつけて。しょっちゅう借りてるんでしょ？」

「まあな」

破れかぶれといった態で、尾木は否定しなかった。

「じゃあ、多香子も乗っけたことがあるんだ……」

独り言のように呟きながら、好恵は助手席を見やった。

「これで何度目だ？ お前は相当しつこいな。お前の方がスッポンじゃないか」

尾木が忍び笑いを漏らす。

「上手いこと言ったつもり。笑えないわ」

「笑わせるつもりで言ったわけじゃない」

「そう。何でもいいわ。それじゃ多香子に愚痴を聞いてもらおうかしら、尾木さんにこんなひどいことを言われたって」

「待て。待ってくれ」と、尾木が狼狽を見せた。ここでのことが多香子に伝わったらどうなるか、おそらく多香子は尾木の人間性を疑うだろう。尾木はそれを恐れているに違いなかった。

「やっと認める気になった？」

「済まない、嘘を吐いていた。悪かったよ。多香子と付き合っている。だから今日のことは黙っていてくれないか？」

尾木の謝罪は下手な役者の、棒読みの台詞のようで、感情がこもっていなかった。

好恵はキッと尾木を見据えた。

「嫌よ。友達として多香子に忠告するわ、尾木さんとは別れなさいって」

「赦してくれ、お願いだから……」

おざなりな言い方には、とにかくこの場を早く脱したいとの魂胆が窺えた。

「赦さない。どんなにひどいことを言ったか、分かってないようね。死んでも赦さないわよ」

尾木が黙り込んだ。座席に深々と座り直し、目を閉じる。

善後策を考えているのだろう。また嘘を吐いてこの危機を逃れようとするに違いない。その前にこっちが先手を打って、尾木に最後のダメージを与えたい、立ち直れないほどのダメージを。これから先の人生を暗く沈んだままで過ごさねばならないほどのダメージを。

「死んでやる！ 死んでやるから！」

好恵は叫び、海へ向かって駆け出した。

死んでやる——確かにそう聞こえた。女の声、さっきの女に違いない。

真紀子は携帯電話を耳に当てたまま、窓に近づいた。声のした駐車場に目を向けると、その先の国道を今しも渡ろうとする女が見えた。浜辺へ向かっている。女が何をしようとしているのか、一目瞭然だった。

「大変、自殺する気だわ」

ポツリとした呟きだったが、電話の相手、塚本には聞こえていた。

「自殺？ どうしたんだ？ 何かあったのか？」と、塚本が心配そうに訊く。

真紀子は沙也香の養育費のことで話し合いをしていたところだったが、それどころではなくなった。失恋で絶望感に苛まれた女が、国道から浜辺へ下りていく。男は、と見ると、車を降りてきたところだった。慌てた様子はなく、いかにも大儀そうに、駆けていく女を見ている。

「さっきまでいたお客さんが、死んでやるって言って海へ駆けていったのよ、若い女性がね」

「ただ事じゃなさそうだな。誰かと一緒なんだろう？ 男か？」

「そう」

「男はどうしてる？」

「ゆっくり女のあとを追ってるわ。国道を渡ってる」

「ゆっくりってことは……本気にしてないのかもな」

「そうかもね」

あの男には恋愛に命を懸けた女の情念が理解できないだろう。ヨリを戻したくてやっている猿芝居くらいにしか思っていないに違いない。

「男の気を引こうとしているだけだろう。そんなところだ、きっと」

ここにもいたことを真紀子は思い出した。塚本もまた、女の悲痛の叫びに耳を傾けようとしない男のひとりだ。揃いも揃って傍観主義的な男どもに、真紀子は腹が立って仕方がなかった。

「何か根拠があるわけ？ 見てもいないくせに」

「いや、根拠なんてないが……」

「決めつけたように言ったじゃないの」

「決めつけてなんかいないだろ。お前が勝手にそう思っただけで……」

塚本の声は真紀子には届いていなかった。真紀子の意識は浜辺にあった。

状況が変化した。

女が浜辺で立ち止まった。何か叫んでいるようだが、遠すぎてもちろん聞こえないし、よく見えない。男は相変わらずゆっくりとした動きで近づいている。

「ねえ、どうしたらいい？」と言い、どうでもいい塚本の言い訳を遮る。

すぐにでも女のために何かしてあげたいが、状況に切迫感はなくなっていた。

「俺の話は無視かよ。まあいい。で、どうなったんだ、その後？」

「女が立ち止まって、男が近づいてるわ」

「男が謝ったから赦そうとしてるんじゃないのか？」

塚本は、騒ぎ立てるほどのことでもなかったんじゃないのか、とでも言いたげだった。

男が謝ったのだろうか。思えなくはないが、そうあって欲しくなかった。

簡単に赦しちゃ駄目よ。赦すにしても、土下座くらいさせなさいよ。

「あの男が本気で謝ったとは思えないわ」と、罵って言う。

「誰だか知らないが、相当嫌っているみたいだな」

「あなたと同じくらいにね」

「ふん、言ってる。とにかくもう少し様子を見て、海の中に入るようだったら警察に電話した方がいいだろうな。そんなことはないと思うが」

「分かった。そうする」

「それから……何度かけてきても答えは同じだ、ない袖は振れない」

プツリと電話が切れた。

まだ塚本に文句を言い足りなかった。これからも塚本が翻意し、お前には負けたと根を上げるまで執拗に沙也香の養育費を要求するつもりでいた。だが、真紀子は今日のところはおとなしく引き下がった。浜辺の様子が気になって仕方がなかった。

風が出てきたのか、波が高くなっていた。波頭が荒れている。

目を細めて凝視すると、男が突然走り出した。逃げるように女が海に向かって駆けていく。

真紀子は呆然となった。

殺す気だわ——と思った。

馬鹿な考えをやめさせなければ身の破滅だ。

尾木は恐れ、やめさせるべく好恵の元へ急いだ。

ただの脅しだろうと思っていたが、どうやら甘く見ていたようだ、好恵は本気らしい。

「待てよ、待てたら！ 話を聞いてくれ！」

砂浜に足を取られながらも、尾木は猛然と駆けた。スリッポンの隙間から砂が入り込み、走りづらい。好恵のように自分も靴を脱ごうかと思ったが、そんな余裕はなかった。好恵はパンプスを手に持ち、すでに海の中に足を踏み入れている。バシャバシャと白い波頭を蹴っている。

急がなければ好恵の計略に嵌まってしまう。

ほんのちょっと前、好恵は浜辺で立ち止まった。死んでやると脅してはみたものの、いざとなると怖くなって翻意したのだろうと尾木は思った。

「やっと話を聞く気になってくれたんだな」

好恵を刺激しないように、できるだけ穏やかな声で言った。

「話って何よ？」

尾木は真顔を作った。

「さっきの話はなかったことにしてもいいと思っている」

急場凌ぎだった。この場を収めるにはそれしかないと思った。

「なかったことにする？ 多香子はどうするの？」

「もちろん多香子とは別れる」

好恵は穴のあくほど尾木を見つめ、そして大笑した。

「その気もないくせに」と、憎々しげに言う。

「いや、本当だ。多香子とはもう会わない。だからこっちに来てくれないか？ もう少し話し合いをしよう。話し合えばまた僕たちは上手くいくはずだ」

なんて頭の悪い人なの、とでも言いたげに、好恵が溜め息を吐いた。

「あなたとの交際を続けたくて、わたしがこんなことをしたとでも思ってるの？」と、嘲りの冷笑を浮かべて言う。

尾木は戸惑い、驚きを隠せなかった。

「違うのか？」

「見損なわないで。誰があんたなんかと続けたいと思うもんですか。復讐よ」

「復讐って……何だよ、それ？　ちょっと大袈裟じゃないか。たかが、と言っちゃ悪いけど、振られたくらいで……」

「ただ振られただけなら、わたしも復讐なんて考えなかったわ。だけどあなたは嘘を吐いた。嘘を吐いて誤魔化そうとした、簡単に騙せる馬鹿な女だとわたしを見下して。それならまだしも、あなたはわたしを尻軽女呼ばわりしたのよ。生まれて初めてよ、そんな屈辱的な言葉を浴びせられたのは。絶対に赦せないわ」

その清楚な容貌に似つかわず、好恵は内に激しいほどのプライドを秘めていたようだ。

「あれは言葉の綾で……」

なおも言い訳を試みようとするが、好恵の憎悪に満ちた目に、尾木は言葉が続かなかった。

確かにひどい暴言だったと思う。勢いに任せて口が勝手に動いたとはいえ、言ってはならない言葉だった。だから復讐したいほどに憎む気持ちは分からないでもなかったが、それがどうして自殺することで復讐に結びつくのか、尾木はいまいちピンとこなかった。振った女を自殺に追いやったという重い十字架を背負わせ、そのことで生涯にわたって苦悩を与え続けようとするつもりなのだろうか。

得心のいかない尾木に好恵が、フッと小さな笑みを漏らした。

「死ぬ気なんて初めからなかったわ。騒ぎを起こしたかっただけ。自殺騒動を起こせば、あなたの信用はガタ落ち。会社での立場も悪くなるでしょうね、これからもトラブルを起こしかねない要注意人物と見なされて。プロジェクトを任されてるって言ってたけど、それもどうなることやら。多香子とは別れることになるでしょうし、平本さんや他のお友達との仲もおかしくなるでしょうね」

ふふふ、と声を出して笑ったあと、好恵は視線を宙に向けた。

「でもね、考えたの、それじゃ頭のおかしな女が尾木さんの気を引こうとして狂言自殺を図っただけと思われるんじゃないかって。むしろそっちの方が可能性が高い気がしたの。わたしはあくまでも可哀想な弱い女、あなたは冷徹で悪い男、この図式はどうあっても崩せないわ。で、どうするか。神様はわたしの味方だったのね、いいことを思いついたの、あなたに厳罰を与えるための、簡単でもっと効果的な方法を」

もてあそぶように、好恵が悪戯っぽい目を尾木に向けた。その目を国道の方に移す。尾木は好恵の視線を追った。好恵が見ていたのはふたりがさっきまでいた、白い造りの喫茶店だった。窓に人影があった。

「何だよ？ 何をするつもりだ？」

「窓に女の人がいるのは分かるでしょ？」

「ああ、さっきの女主人だろ。それがどうかしたのか？」

「ひょっとしたらこっちを見てるんじゃないかって思って見てみたら、やっぱり見ていたわ」

「だから、どうしたんだよ？」

「あの人に証言者になってもらうの」

「証言者？ 何の？ 何だよ、何をするつもりなんだ？」

尾木の胸中を重い風が過ぎた。好恵が何を企んでいるのか、さっぱり思いつかない。

「あなたには殺人者になってもらうの」と、事もなげに好恵は言った。まるで、何か問題でもあるわけ？ とでも言うように。

「僕が好恵を殺すって言うのか？ 馬鹿な。そんなことするわけがないだろう」

「殺しはしないわよ。殺されてたまるもんですか。そんな風に見えるようにするってことよ。あの女の人にそう見えればいいの。言い争いの末にわたしはあなたに殺されかけて海に逃げてきた、あなたがわたしを追いかけてきた、さらにわたしは逃げて、あなたを振り切ってあの女の人のところへ行くの、そしてこう言うのよ、助けてください、あの男に殺されますって。だから、正確には殺人未遂の罪を被ってもらうことになるわね」

不敵に微笑む好恵を、尾木は呆然と見た。

そんなに上手くいくはずがないと思いたいが、あながちそうとも言えない。いや、上手くいく公算の方が高いかもしれない。ふたりの女が結託すれば痴漢犯罪の冤罪でもみられるように、男の反論には耳を傾けてもらえないだろう――。

好恵を捕まえなければ、捕まえて海から離さなければとんでもないことになってしまう。馬鹿な考えをやめさせなければ身の破滅だ。

尾木は駆けた。事は一刻を争った。

食いついてきた、と好恵は思った。

自ら進んで悪い状況を作り出しているとも知らず、馬鹿な男だ。じっとその場にとどまっていれば殺人を犯しているようには見えなかったのに。

波を蹴って海の先を目指す。やがて尾木は追いつくだろう。そしたら演技の見せ所だ、と好恵は思った。演技の経験はないが、いかに殺されそうなふりをするか、それはそんなに難しいことではないだろう。観客はたったひとり、しかも鼻眞目で見てくれるはずだ。

好恵が振り返ると、尾木はすぐそこに迫っていた。転びそうになりながら、腿で波を蹴っている。必死の形相を見せている。

「助けて！ 殺される！」

そう叫んで、好恵はクロールで沖へと向かった。

好恵には余裕があった。泳ぎには自信がある。中学、高校と水泳部で、海の中なら尾木に捕まることはないと思った。振り切る確信があった。あとは頃合いをみて岸へ引き返せばいい。

喫茶店の女主人にアピールすべく、水面を叩き、大仰に手を振る。

「殺される！」と、声を張り上げる。

尾木が近づいてきた。尾木は平泳ぎで近づいてきたが、その泳ぎはお世辞にも褒められたものではなかった。不格好で非効率。溺れそうにはなかったが、習いたての子供のように、なかなか先へ進まない。

「頼むからやめてくれ」と、やっと海面に顔を覗かせて言う。

好恵は立ち泳ぎで尾木との距離をとった。いつでも引き離せる思いがある。

「力尽くでやめさせてみなさいよ。まあ、無理でしょうけどね」

不格好な泳ぎで、尾木がなおも近づいてくる。目と鼻の先、手を伸ばせば届きそうなところまでできた。

今だとばかりに、好恵は突然、自分の首を絞めた。

くっきりと痕がつくように、両の親指と人差し指でわざと強く締め付けた。

「何をしてるんだ？」と、尾木が目を剥いて訊く。

「こうした方が説得力があるでしょ？ あなたに殺されかけたって」

「そんな……。お願いだから、何でもするからもう赦してくれないか」

好恵は耳を貸さなかった。ひと搔きして尾木から離れると、喫茶店の方を見た。期待していたとおり、女主人は一部始終を見ていてくれたようだ。女主人は国道のところにいる。こっちへ駆け寄ってくる。

あとは岸に泳ぎ着き、助けを求めるだけだ。それで復讐は完成する――そう思ったときだった。好恵の足に鋭い痛みが走った。一瞬、クラゲに刺されたのかと思ったが、それは過去にも経験した痛みだった。水泳の練習中に何度かこむら返りを起こし、溺れかけたことがあった。すっかり忘れていた。よりによって、こんなときに起きるなんて――。

「助けて」

今度は尾木に向かってアピールした。元水泳選手とはいえ、服を着ての泳ぎには慣れておらず、まとわりつく衣服が鉛のように重く感じられる。大仰な動きをしたせいで思った以上に身体が疲れていて、腕だけの力では岸まで辿り着けるかどうか自信がなかった。

尾木が訝しそうに好恵を見た。

「何だよ？ 助けてくれって僕に言ったのか？」

「そうよ。他に誰がいるのよ」

「今度は何を企んでるんだ？」

尾木は警戒して近づこうとしなかった。

「何も企んでないわよ。いいから早く助けなさいよ」

足の痛みが好恵を苛立たせたが、それはすぐに恐怖に取って代わられた。

好恵の腕は限界に近づきつつあった。かろうじて動かしてはいるものの、身体を浮かせるほどの力を発揮しなくなった。いつ沈んでもおかしくない。

「お願いよ……」と、切ない声で訴えかける。

高い波にも体力を奪われ、限界がすぐそこに迫っていた。沈みかけた好恵は、腕に渾身の力を込めて水を掻いた。あと何分、いや、何秒生きられるだろう。

「本当か？ 演技じゃないだろうな。僕を騙そうと……」

尾木の声が聞こえたが、それは途切れた。腕に力が残っておらず、好恵の身体はスーッと、まるで足に重しをつけた潜水夫のように、海の中に沈んでいった。好恵には考える力も残っていなかったが、ふと思いついたことがあった。

人を陥れようとするこんなわたしに、神様が味方するわけないわよね――。

海に浮かんでいるピンクと黒の豆粒を見つめながら、真紀子は浜辺を駆けていた。

助けて――の声が聞こえた。間違いない。男が女を殺そうとしている。

真紀子は焦れたかった。電話したばかりで、そんなに早く警察が来るはずはないのだが、急がないと手遅れになってしまう。もう手遅れかもしれない。波打ち際までやってきたときに、ピンクが見えなくなってしまった。そこにいるのは黒の男だけ。

大変！ 女は沈められている！

真紀子は国道を振り返り、耳を澄ました。警察はまだ来ないようだ。

海に視線を戻す。

すると、男が波間から顔を出した。そしてすぐにまた潜った。息継ぎをただけのようだ。男は同じことを二度、三度繰り返すと、もう潜らなかった。泳いでゆっくり近づいてくる。やっとその顔が認識できるようになった。男は必死の形相をしていた。死に物狂いで、右手で波を掻いている。左手に何か掴んでいる。浮き沈みしながらも、その手を離さなかった。手に掴んでいるもの、それはピンク色をしていた。男の連れ、親近感を抱いたあの女だった。

「死んじゃったの？ 息はあるの？」

真紀子が呼びかけても、男は無反応だった。生きているのがやっとといった態で浅瀬まで泳ぎ着くと、仰向けの女の両手を取って引きずり、よろよろと歩き出した。女の身体を容赦なく波が洗う。波打ち際まで来た。女を波が届かないところまで持ってくると、男はその横にへたり込んだ。精根尽き果て様子で、肩で大きく息をしていたが、こうしてはいられないとばかりに女の胸に手を置き、その胸を押し始めた。リズムカルに力強く押している。口移しに息を吹き込んでいる。

真紀子は歩み寄り、女の顔を覗き込んだ。

男の動きに合わせて女の顔は動いたが、どう見ても女は死んでいた。マネキンのようなその様相に、生きている兆候は何もなかった。

「殺したのね！ あなたが殺したのね！」と、怒声を浴びせかける。

波間で男は女を沈めたように見えた。二度、三度と潜り、浮かび上がろうとする女をその都度、海中へ押し戻したようだった。真紀子は男が女を溺れさせて殺したと直感していたが、女の首を見て考えを改めた。

「首の赤い筋……。絞め殺したのね！ なんてひどいことを……」

真紀子は後退った。女の胸を押している男がその動きをやめ、飛びかかってくるのではと恐れた。浜辺に殺人犯とふたりきり。警察はまだ来そうにない。

男が口移しの動きをやめた。顔を上げ、真紀子を睨みつける。

真紀子はもう一步後退った。近くに、武器になりそうな棒っ切れでもないかと探したが、そんなものはひとつもなかった。

「ごちゃごちゃうるさいんだよ！ 俺は殺しちゃいない。黙っててくれないか！」

険しい顔で怒鳴ると、男は再び女の蘇生に取りかかった。

一瞬たじろいだものの、真紀子は黙っていられなかった。

「首を絞めた痕があるじゃないの。惚ける気？」

「これはこいつが自分でつけたものだ」と、手を休めずに男が言う。

「自分でつけた？ 自分で首を絞めたって言うの？」

意味が分からず、真紀子は訊いた。

「そうだ」

「何のために？」

「僕に殺人未遂の罪を着せるためだよ。僕らが別れ話をしていたのは知ってるだろ。頭にきた好恵は僕に復讐しようと考えたんだ。殺されかけたと言ってあんたに助けを求め、僕に殺人未遂の罪を着せ、僕を社会的に抹殺する、それが好恵の狙いだったんだ。だけど好恵は泳いでいるときに足をつって溺れてしまった。このままじゃ殺人未遂どころか殺人犯にされてしまうから、こうやって人工呼吸をしてるんだよ。好恵には生き返ってもらわなきゃ困るんだ」

好恵という名前だったのか――。

名前を知ったことで、真紀子の女への親近感がいや増した。

疲れ果てた姿で必死に蘇生を試みる男の話は一応の筋が通っていた。だが、女が自分で自分の首を絞めたという話は、容易には信じがたかった。

「殺しておいて助けるふりをしてるんじゃないでしょうね？」

罪を逃れるためのでっち上げと考える方が妥当だ。人工呼吸にしても、うがった見方をすれば自らの誠実性をアピールしているだけかもしれない、と考えられなくもなかった。

「そこまで疑うのか？ 好恵が言ってたけど、やっぱりあんたは好恵の味方だったんだな」

そう、わたしは好恵さんの味方。か弱い女性の味方。

好恵の胸を押す男の力が明らかに弱くなってきていた。今にも好恵の上に倒れ込みそうだった。生き返って真実を語って欲しいと願う男の話に嘘はないように思えてきた。それでも、たとえこの男に罪はないとしても、女を死に追いやったという道義的責任はあるはずだ。この男のせいであたら若い命が奪われたのは間違いないのだから。自分を味方だと思ってくれた好恵のためにもこの男を糾弾し、何らかの罰を与えなければならない、と真紀子は思った。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

真紀子は国道へ走り、パトカーを喫茶店の駐車場へと誘導した。駐車場には赤いBMWが取り残されたようにポツンと駐まっていた。

「あなたが通報してくれたんですか？」

ええ、と返答するのももどかしく、真紀子はふたりの警官を引き連れて浜辺へ急いだ。

駆け寄る先では男が手を止め、虚ろな表情でこちらを見ていた。

真紀子は射るように指をさした。男がその場を動けなくするかのよう。

「あいつが殺したんです。わたし見てました。あいつが海の中で女の首を絞めたんです」

女主人が戻ってきた。ふたりの警官を伴っている。

尾木の目にはその光景が蜃気楼のように見えた。幻だ、そのうち消えると思ったが、近づいてくる三体はその姿を大きくするばかりだった。

「この男がこうやって首を絞めたんですよ」

女主人が両の人差し指と親指で輪を作り、近づいてくる。ふたりの警官は女主人の話にさして耳を傾けるでもなく、尾木の元へやってきた。

「疲れたようだな、ちょっと代わろう」と、背の高い方の警官が言った。

尾木は好恵の身体から離れ、砂の上で大の字になった。警官を前にして失敬だとは思ったが、肉体の反射的な欲求を抑えることはできなかった。

「人工呼吸はどれくらいやってたんだ？」

いかにも柔道をやってましたと言わんばかりのガタイをしている、もうひとりの警官が訊いた

。

背の高い方は肋骨が折れるほどに好恵の胸を押し続けていた。

「十分か十五分か……よく分かりません」

やおら起き上がり、尾木は言った。いつまでも大の字では心証が悪い。

「助かりそうか？」と、ガタイのいい警官が背の高い方の警官に訊く。

背の高い方の警官は、尾木が予想したとおりには首を振らなかったものの、難しい顔をした。無理そうだ、と口で言うのは憚れるのだろう。

「もうすぐ救急車もやってくる。助かってくれればいいが……」

ガタイのいい警官が名前や住所を訊き、尾木は正直に答えた。

「人が殺されかけていると通報があったんだが、実際のところ何があったんだ？」

尾木は喫茶店に着いてから今までのことを話した。正確に思い出し、的確に答えようと努めた。この警官に運命を握られている気がした。

ときに頷き、ときに疑問を質しながら警官はメモを取った。一番の疑問はやはり首についている絞められたような痕だった。

「被害者が自分で首を絞めたっていうのはねえ……説得力に欠けるな」

「ですから、わたしを殺人未遂の罪に陥れようとしたんですよ。信じてください」

女主人が警官の後ろから顔をスッと差し出した。話したくて堪らないといった顔をしていた。

「信じちゃ駄目ですよ、嘘なんですから。さっきも言いましたが、わたしは見てたんです、この目でハッキリと。この男がこうやって女の首を絞めるのを」

女主人はもう一度、両手で輪を作った。

「話が食い違えますね。どっちが本当のことやら」

そう言いながらも、警官が自分を信じてくれないのを尾木は確信していた。被害者が自分で自分の首を絞めたなんて、罪を逃れるために吐いたとしても、相当に稚拙な嘘にしか聞こえないだろう。別れ話を承諾しない女に苛立ち、カッとなって男が首を絞めて殺した――誰しもがそう考えるに違いない。

けたたましいサイレンの音が鳴り響き、数台のパトカーと救急車がやってきた。浜辺を警官、鑑識、刑事が駆けてくる。その後ろから救急隊員が担架を持って走ってくる。

サイレンの音を聞きつけ、近所の人が集まってきた。何の騒ぎ？ と、頬を寄せ合っている。たったひとりの目撃者の存在は、思っていた以上に脅威だった。

女主人はやってきた刑事に走り寄ると、さっき警官にして見せたように、両手で輪を作り、同じ言葉を吐いた。

「こうやってあの男が絞め殺したんです、海の中で。わたし見てました。この目で見てました」

それから女主人は事の顛末を饒舌に話した。刑事は熱心に耳を傾けた。そしてガタイのいい警官に説明を求めた。

「男の話とは多少違う箇所もありますが、状況的に見て、この女性の言っていることに間違いはないのでしょうか」

そうか、と刑事が頷く。それは尾木が犯人であることを少しも疑っていないようだった。

鑑識が現場の写真を撮り終え、好恵の身体は担架に乗せられた。救急隊員が救急車へと急ぐ。その様子を、尾木は絶望の中で見ていた。好恵が目論んだとおりに、身の破滅になると思った。どうあがいても、たったひとりの目撃者に太刀打ちできそうになかった。

刑事がやってきた。

「詳しい話を署の方で聞かせてもらえませんか？」

時間の無駄だが、とりあえず話だけは聞いてやる――尾木の耳にはそんな風に聞こえた。

警察署に着くと、尾木は抗弁したものの、逮捕され、拘置された。女主人の方が嘘を吐いていると言っても聞き届けてもらえなかった。被害者と女主人の間には利害関係がなく、女主人が嘘を吐く道理がないというのが警察の見解だった。

尾木についての稲葉という国選弁護人も同じ見解を示した。

「裁判は勝てる見込みがありませんね」

一目でキャリアが短いと分かる年の若い弁護人が、自信なさそうに言う。

裁判が始まると、そのとおりの展開になった。

唯一の目撃者として証言台に立った女主人には説得力があった。裁判員は皆が皆、信憑性を持ったようだ。かたや、尾木の話には首を傾げた。中には眉をひそめ、不快な顔をする裁判員もいた。

稲葉弁護士は裁判を早く終わらせるべく、事務的な態度に終始した。

「死刑にはならないでしょうが、実刑は免れませんから」

殺人罪には執行猶予がつかないらしい。

実刑――

刑務所行き――

尾木は打ち震えた。映画やテレビでの話が現実、自分の身に起きようとしている。悪い夢だと思いたかった。夢ならいつか覚める。しかし、悪い夢は覚めそうになかった。好恵の死因は絞殺によるものではなく、溺死によるものと特定された。肺に大量の海水が溜まっていたらしい。それは朗報だった。尾木による絞殺説は消えた。が、首に絞めた痕をつけたのが好恵自身だとは見なされなかった。特定に至らず不明ということにされ、必然的に、尾木が海中で首を絞め、その最中に好恵は溺死したということになった。女主人の嘘は覆らなかった。

拘置所の中で、次の公判までの悶々とした日々を過ごす。

若い弁護人が持ってくる話は、どれもこれも腹に据えかねるものばかりだった。

曰く―― マスコミは総じて喫茶店の女主人を持ち上げています。女の敵に鉄槌を下す稀代の女傑と讃えて。

曰く―― 弁護士事務所に寄せられるメールは苦情ばかりです。どうしてあんな男の弁護をするのかと。中には脅迫まがいのものもあります。

そして次の報告に、尾木は最もショックと怒りを覚えた。

曰く―― 平本さんとか多香子さんに尾木さんの人となり証言して頂こうと依頼したんですが、関わりたくない拒絶されてしまいました。

所詮、そんなものだったのかと思う。平本との友情は見せかけだけで、儚くも露と消えてしまった。多香子との愛も幻に過ぎなかった。身体は結べても、心の絆は結べていなかった。

尾木は自棄になりかけた。平本や多香子だけでなく、周りの連中はみんな去って行くだろう。裁判の行方は知っている。あの女主人の証言を覆すのは不可能に近く、勝てる見込みはほとんどない。自分は好恵に陥れられたんだと訴えても、誰も信じてくれない。あと何回かの公判を終えれば刑務所行きは間違いない。もう人生は終わってしまった――。

いつものように稲葉弁護士が姿を見せた。またろくでもない話を聞かせに来たのだろう。聞きたくもなかった。話をする気になれず、尾木は追い返そうかと思った。が、若い弁護士は妙にうきうきした様子を見せており、珍しく、いや初めていいニュースを持ってきたようだった。

「奇特的な証言者が見つかりました。向こうから証言したいって言ってきたんですよ」

稲葉弁護士が、その証言者が語った話の内容を教えてくれた。尾木はその人物を知らなかった。もちろん面識はなく、どうして自分の助太刀をする気になってくれたのか、合点がいかなかった。とはいえ、その内容は女主人の人間性を否定し、証言を覆すに十分なものだった。

尾木の胸に希望が灯った。これなら逆転できるかもしれないと思った。

「次の公判が楽しみだ」と、若い弁護士が顔をほころばせる。

尾木もつられて、思わず笑みがこぼれた。と同時に、尾木は心の奥底にしまい込み、蓋をして押し殺していた感情の存在を意識させられた。

次の公判が開廷された。

名前も知らなかった証言者が証言台に立ち、宣誓する。

証言者は塚本源司と名乗った。四十二歳ということだが、そのやつれた様子からかなり老けて見えた。髪は傷んだ芝のように疎らで、顔には彫刻刀で彫ったような深い皺がいくつも刻まれている。しかしその目は、何かをやってやろうという強い意志で輝いていた。喫茶店の女主人の元夫で、建築業を営んでいるとのことだった。

「すぐに知られると思いますので先に行っておきますが、わたしには逮捕歴があります。そのことでわたしを、信用ならない胡散臭い奴だと思いにしないでください。逮捕されたのは酔っ払って喧嘩になってしまい、相手に大怪我をさせてしまったからです」

「その件が本件と何か関係があるのでしょうか？」と、裁判長が訊く。

「あります」

塚本のキッパリとした口調に、裁判長は先を促した。

「本件の目撃者である真紀子とわたしは、『ブルー・ラグーン』の近くにあるスナックで飲んでいました。周りをご近所の知り合いばかりです。初めは楽しく飲んでいたんですが、そのうち真紀子が他の客と口論を始めました。原因はその男性客が、女は男の言うことを聞いていればいいんだと、女性蔑視的な発言をしたからでした。男は女がいなければ何もできないと、真紀子がい返し、口論はエスカレートしました。そのうち終わるだろうとたかをくくっていたんですが、突然パチンと乾いた音がスナックに響きました。真紀子はその男性客を叩いたんです」

真紀子の方が先に手を出したという事実を強調するかのようになり、塚本は間を取って裁判員を見渡し、話を続けた。

「真紀子には暴力的な傾向があります。今回の事件では暴力を振るってはいませんが、スナックの件では手加減なしに、頭を抱えて防御の姿勢をとる男性客を叩きました。そしてわたしに、あんたもやりなさいよ、と言いました。わたしは酔っていたこともあって妻に加勢しました。すると、真紀子への手出しを控えていた男性は猛然とわたしに食ってかかりました。殴り合いになり、テーブルの上のグラスだとか食べ物が床に散乱しました。わたしは男を床に組み伏せ、力の差を見せつけました。観念したように男の目に戦意が見えなくなったので、わたしはそれでやめようと思ったんです。しかし真紀子はまだ飽き足らなかったようで、わたしの横から男の顔を殴り始めたんです、分厚いガラスの灰皿で」

塚本は、いかに真紀子が残虐であるかを印象づけるようにまた間を取り、裁判員を見渡した。そしておもむろに口を開いた。

「男の鼻から鮮血が流れ、さすがにやり過ぎだと思い、わたしは真紀子から灰皿を取り上げました。男はぐったりと床に転がったままでした。マスターの通報でやってきた警官にわたしは逮捕されました。わたしが灰皿で男を殴ったということにされました。わたしは抗弁しませんでした。男を殴ったのは事実ですし、妻を庇おうという気持ちもあったんです。ところが、この人がやったんですね、と確認する警官に、真紀子は頷き、そうです、と言ったんです。わたしは止めたんですが、手がつけられなくて、と付け加えました。そして黙って、その場にいた他の客やマスターを目で威嚇しました、本当のことを言ったら承知しないわよ、と。真紀子は平気で嘘を吐きます。自分の都合のいいように、事実をねじ曲げるんです」

裁判長が眉根を寄せ、難しい顔をする。

「しかしそれでは、喫茶店の女主人の目撃証言が嘘だという証明にはなりませんよね。過去に嘘を吐いたからといって今回も嘘を吐いているとは限りません。今回も事実をありのままに言っていないと、あなたがそう考える理由は何ですか？ 具体的な証拠があるんですか？」

「あります」

塚本が決然と言い放つと、傍聴席からざわめきが起こった。

「では続けて」

「はい。実は、被告人たちの間でトラブルが起きていたとき、わたしは真紀子と電話で、娘の養育費のことについて話をしていました。そのとき、真紀子が駐車場での異変に気づき、わたしに言ったんです、自殺する気だわ、と。死んでやると言って海へ駆けていった、とも言いました。むろん死んでしまった女性のことです。真紀子は被告人に初めから殺意があったかのように証言しましたが、そうでないことは本人も分かっていたんです。この事件は被告人が言うように、死んだ女性の狂言自殺だった可能性が高いと思われます。殺人事件ではなかったのではないのでしょうか。被告人が被害者の首を絞めたということですが、その点についてはわたしは何も言うことができません、見ても聞いてもいないのですから。しかし、ハッキリ見ていたという真紀子の嘘を暴くことはできます。何故なら……真紀子は近視だからです。0・1だったと記憶しています。そんなに生活に支障はないからと普段は眼鏡をかけませんし、コンタクトは持っていません。あの日も眼鏡はかけていなかったはずです。そんな目で遠くの、曇り空の下で波に揺れるふたりの姿を、本当にハッキリと捉えることができたのでしょうか？ 波に見え隠れするふたりが何をしていたのか、真紀子には一から十まで見えていたのでしょうか？ わたしにはそうは思えません」

傍聴席にどよめきが起きる。が、裁判長に制され、それはすぐにやんだ。

「つまり、目撃者は細部にわたって見ていたわけではなく、証言は作り話であると、そういうことですね？」と、裁判長が訊く。

「そうです。見えるはずがありませんから、勝手に作ったんでしょう」

「しかし、どうしてそんなことを？ 何の得にもならないでしょうに」

「確かなことは言えませんが、おそらくそうせざるを得ない何かがある真紀子の中にあっただのではないのでしょうか、損か得かということではなしに」

「そうせざるを得ない何か……。それはいったい何ですか？」

「さっきも言いましたが、真紀子は女性蔑視的な言動にとっても敏感に反応します。過剰ともいえるほどで、女性に対して敬意を払わない男にはとことん牙を剥きます。真紀子本人から聞いた話ですが、わたしと出会う前、真紀子はある男に振られました。多額のお金を貢ぎ、浮気にも目をつぶったというのに真紀子の方が浮気相手だったそうで、激怒した真紀子はその男に仕返しをしました。男の勤務する会社に嫌がらせの電話をかけ、誹謗中傷するビラを会社の周りのあちこちに貼って廻ったんです。強姦魔であるとか、暴力男であるとか、金に汚いとか、そういったことが書かれていて、真紀子はケタケタ笑いながら話しました。警察から嚴重注意を受けたにもかかわらず、まだやるつもりだったと言っていました。結局、その男が会社を辞めて、真紀子の復讐は終わりました。男にもやましいところがあったのかもしれませんが、ですが、会社を辞めるほどのひどいことをその男はしたのでしょうか。真紀子が何倍にも膨らませた虚像によってその男は罰せられたんです。それはこの事件の被告人にもいえます。何も落ち度がなかったとはいいません。しかし、だからといって真紀子の作り話で罰を受けなければならないのでしょうか」

尾木の心底の蓋がずれる。湧き出てきた感情がひたひたと尾木を沈めようとする。

尾木を弁護する塚本の証言は終わりを迎えていた。

「元妻の真紀子を貶めるのはわたしの本意ではありません。わたしはただ、真紀子の悪意に満ちた嘘のせいで誰かが苦しむのをこれ以上見たくないだけです。冤罪を防ぎたいんです。本当はこんな裁判に出て、元妻の悪行を並べ立てたくはありませんでした。ですが、被告人を救えるのはわたしだけのようでしたから、あえて恥を忍んで出てきたんです。わたしのことは元妻を裏切った薄情な男と思ってくださっても結構ですが、目撃者の証言に信憑性があるかどうか、裁判員の皆様には今一度、心をフラットにしてお考えください。よろしくお願いします」

退席する塚本を検察側の誰もが苦り切った顔で見送った。対照的に、稲葉弁護士は満面の笑みを浮かべていた。

「この裁判は勝ちですよ。おめでとうございます」

喜びを表そうとしない尾木に、若い弁護士は頭をかいた。

「おめでとうございます、はまだ早いですね。でも、もう少し嬉しそうな顔をなさっても……」

それでも尾木の顔はニコリともしなかった。沈痛に沈み、その目は虚しく宙を漂った。

後日の最終判決で、尾木の判決は稲葉弁護士の言葉どおりになった。検察は控訴を断念し、無罪となった尾木は拘置所を出た。

稲葉弁護士が待っていた。前途洋々たる未来があるのを疑っていない顔をしていた。いくつか仕事の依頼があったのかもしれない。

「おめでとうございます。もう言ってもいいですよ？」

若い弁護士が握手を求める。

差し出されて手を、尾木はためらいがちに握った。おめでとうございますと言われる度に皮肉にしか聞こえず、尾木の心は重くなり、チクリと痛んだ。

「どうかしたんですか？ 勝ったというのにあまり嬉しそうじゃありませんね」

稲葉弁護士が尾木の心底を探るように、その目を尾木の瞳に向けた。そして恥じ入るようにその身を縮めた。

「ああ、すみません。わたしとしたことが……。勝ったからといって喜ばませんよね、人がひとり亡くなっているんですから」

同意を求めるような弁護士の口調だったが、尾木は何も言わなかった。そんな感情もないではなかったが、尾木の心を覆っていたのは別のものだった。

哀悼の気持ちが起きたのかと思いきや、そうでもなかったようで、稲葉弁護士は再び笑みを浮かべた。

「近いうちにマスコミを呼んで祝勝会をやりましょう。有罪と決めてかかったマスコミに猛省を促し、ありのままの事実をきちんと書いてもらうんです。被害者に殺人未遂の罪を着せられようとしていたにも拘わらず、必死に蘇生を試みた尾木さんの真の人間性を伝えさせるんです」

尾木はきっぱりと首を横に振った。真の人間性はそんなところにはない。

「それじゃ、今度はこっちが喫茶店の女主人を訴えましょう。あれだけの大嘘を吐いたんですから当然の報いです。マスコミは注目しますよ」

この若い弁護士は、ここぞとばかりにマスコミに名前を売りたいらしい。

偽証罪に問うつもりだろうか。法律のことはよく分からないが、あの女のことだ、嘘を吐く意思はなかったと嘘を吐き、上手く言い逃れるだろう。

当初は憎く思ったが、女主人のことなど今ではどうでもよく、またしても尾木は首を振った。当然の報いを受けるのは自分の方だった――。

心中を覆う暗い感情を振り払うかのように首を振る。

「あなたには感謝しています。ですが、わたしはこの事件を一日も早く忘れたいんです。そっとしておいてください」

「そうですか……」

残念がる弁護士に背中を向け、尾木は拘置所の前から歩き出した。

忘れたいと願う光景が脳裏をよぎる。それは裁判の最中も、何度もよぎった光景だった。心底から湧き出た暗い感情――悔恨や慚愧の念、やましさを後ろめたさに尾木の心はすっかり沈んでしまっていた。あのときの、海中を漂う好恵の身体のように宙を彷徨っていた。

あのとき――

尾木は波間から沈んで消えた好恵を助けようとして海に潜った。本能的に身体が動いただけで、そこには何の思惑もなかった。が、すぐにある思惑が尾木を支配した。一度目に潜った尾木が見たのは、好恵の憎悪に満ちた目だった。

何をしてるの！ 早く助けなさいよ！ と、その目は言っていた。

このまま助けたらどうなるだろう、と尾木は思った。

おそらく好恵は助けてもらった恩義など何処吹く風とばかりに、浜辺にいる女主人に、この人に殺されそうになりました、と告げるに違いない。

息が続かなくなり、海面に顔を突き出す。息を継ぎ、二度目をゆっくり潜ると、好恵はその手を伸ばし、切なく訴える目をしていた。

お願い……早く助けて……

尾木は好恵の指先を見つめた。ほんのひと搔きし、手を伸ばせば届く距離だった。だが、尾木は背中を向けた。

息にはまだ余裕があったが、波間に浮上した。好恵の吸えない息を思い切り吸う。

なんてしぶとい女なんだ――。

尾木は待った。

充分に間をとり、三度目に潜って尾木が見た光景は、海流に身を任せて漂うクラゲのように、ただの漂流物となった好恵の身体だった。好恵の身体は完全に弛緩し、手足がだらりと伸びていた。尾木は好恵の死を確信した。

歩き出した舗道を木枯らしが吹き抜ける。季節はいつしか冬になっていた。

神様は自分の味方をしてくれたようだ、と尾木は思った。しかし、それには代償が伴っていた

。

あのときの光景を忘れることは不可能に違いない。昼につけ夜につけ、それは襲ってくるだろう。本を読んでいるとき、テレビを見ているとき、電車に乗っているとき、生活のふとした瞬間に、好恵の憎悪に満ちた目が訴えかけるだろう、あなたを一生赦さないと。

尾木は立ち止まってコートの際を立て、顔を隠した。

そして一步一步、怖ず怖ずと歩き出した。

木枯らしに、執拗に身体をなぶられながら――。

了